

19

たけ の くらしゅうらく ひじり じん じゃ ひ も じ

竹ノ倉集落聖神社の火文字



聖神社



権現嶽全景

指 定	町指定保護無形民俗文化財 平成 24 年（2012）2 月 7 日		
所在地	加茂 竹ノ倉 聖神社境内北面		
山 名	権現嶽（標高 189メートル）		
祭 神	未詳		
寸 法	現状の火文字（大の字）	高さ 8.0メートル	幅 9.0メートル
	使用提灯个数	29 張	
	提灯	高さ 25.0センチ	直径 20.0センチ
	口ウソク	長さ（1 号）10.0センチ	直径 0.7センチ
	鉄骨足場	高さ 8.0メートル	横幅 9.0メートル

高知県下でも非常に珍しい岩壁に描く火文字である。

権現嶽の山頂にある聖神社では、毎年旧暦の 6 月 15 日（現在は直前の日曜日）の例祭に、竹ノ倉の氏子達によって山の北面に提灯による火文字が描かれる。明治時代初めから始まったといわれている。過去には「和」「平和」「幸」「栄」などの火文字が描かれていた。以前はモウソウチクで組んだ足場であったが、現在は鉄骨足場となっている。

尖った山頂の火文字は、北部の本村や弘岡の地域からも良く見えて加茂地域周辺の夏の風物詩となっている。

20 まつ お じょうせき 松尾城跡



指 定 町指定史跡 昭和 48 年（1973）4 月 20 日

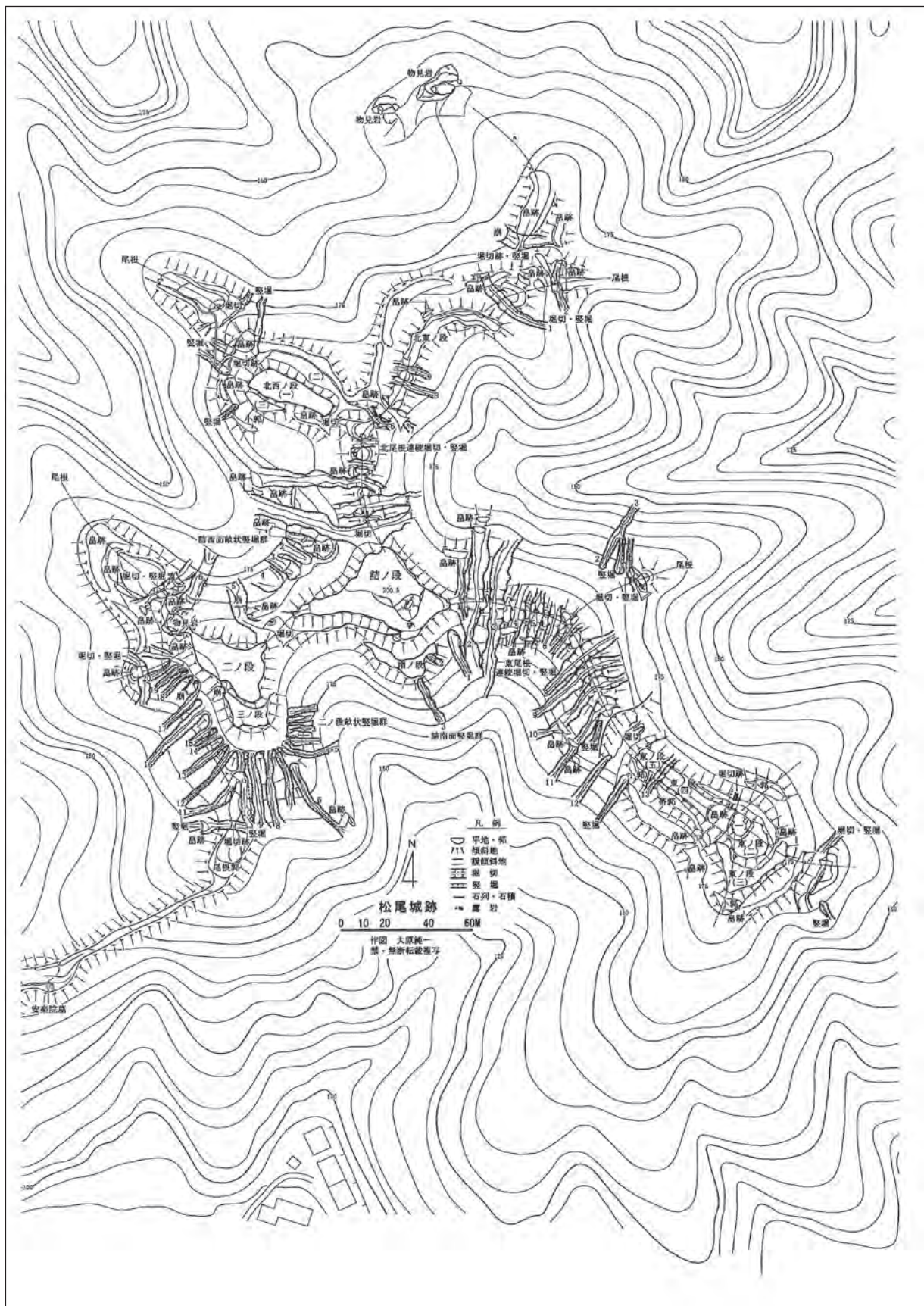
所在地 佐川 上郷 松尾山

年 代 南北朝～室町時代

松尾山の拵がりは東西・南北ともに 900 メートルの広さがあり、標高 200.5 メートルの詰ノ段を最高所としておおむね 5 方向に大きな尾根がのびる山系で、その全域に山城の遺構を残す中世山城跡である。

南北朝の頃、佐川四郎左衛門の居城であり、戦国時代には中村越前守、久武内蔵助の居城であったと伝えられる。城跡は各尾根に堀切、^{ほりきり} 塹堀^{たてぼり}を多用し、特に二ノ段と三ノ段を取り巻く二ノ段畝状^{うねじょう}塹堀群 21 条と詰ノ段から東ノ段にかけて東尾根連続堀切・塹堀群を 14 条^{しつら}設えており圧巻である。

松尾城跡 縄張図（部分）



21 さ かわ じょうせき 佐川城跡



詰ノ段（北）に残る石垣（慶長期）



詰ノ段（南）に残る根石

指 定 町指定史跡 昭和 48 年（1973）4 月 20 日

所在地 佐川 奥の土居 古城山

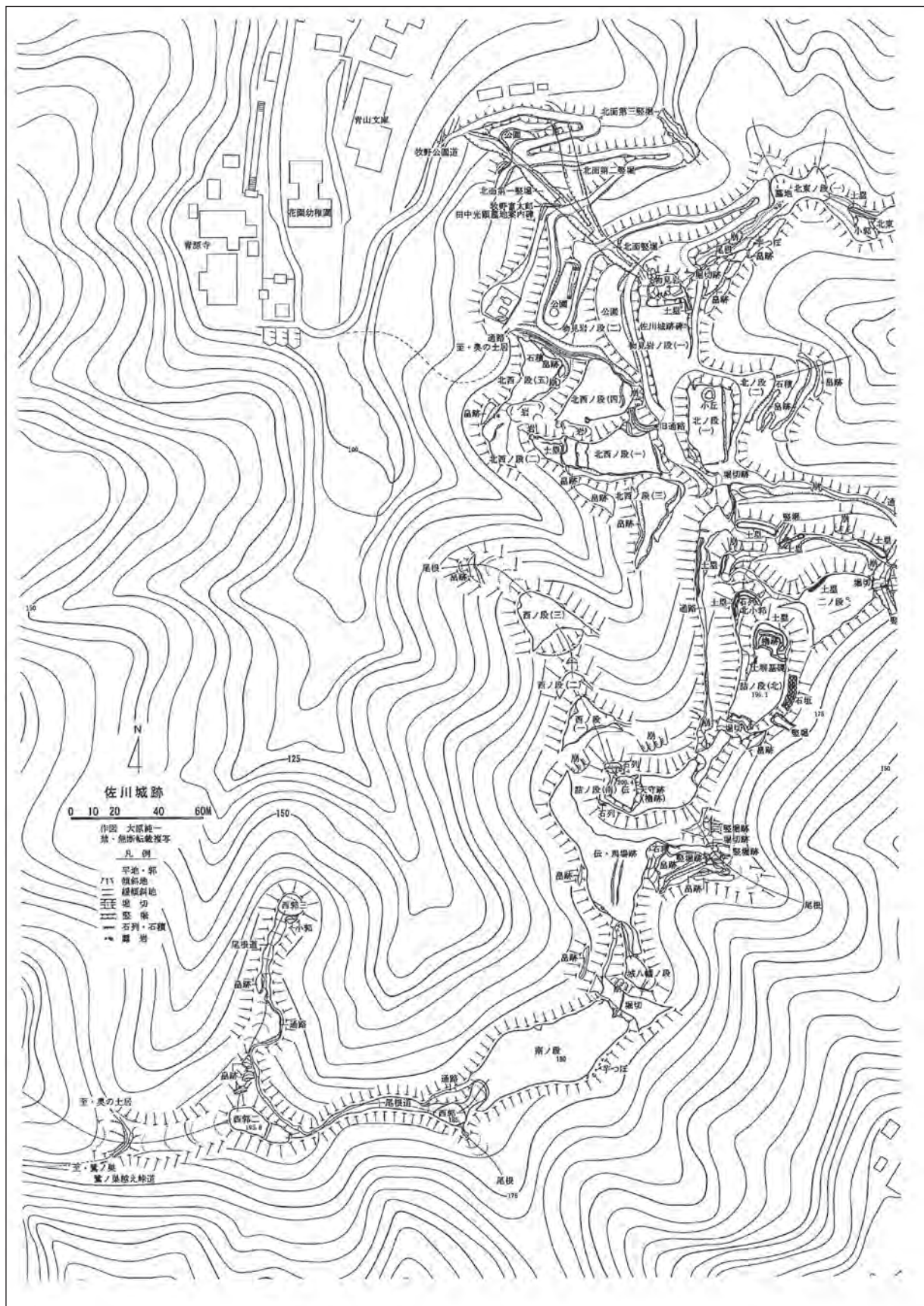
年 代 南北朝～江戸時代初期

古城山にある佐川城跡は、現在桜の名所として有名な牧野公園の上にある。

戦国時代の城主は中村越前守、久武内蔵助の居城であったと伝わっており、江戸時代には深尾氏が城主となったが元和の一国一城令により取り壊され、東麓の土居に住まいを移した。

詰ノ段は堀切を隔てて南北に分かれている。標高 200.4 メートルの本丸跡を示す標柱の建つ場所が詰ノ段（南）で、伝・櫓跡と地山の根石が残っている。詰ノ段（北）は、土塁と土塀基礎、そして東面下には唯一石垣が残っており、斜度 65 度で高さ 2.5 メートル、長さ 16.2 メートルあり、北部隅角は算木積みで北端とし、石垣の石材はチャートを主とした 5～8 段の野面積みである。

佐川城跡 縄張り図（部分）



22 だっばん し し しゅうごう し せき 脱藩志士集合の史跡



指 定 町指定史跡 昭和 48 年（1973）4 月 20 日

所在地 こうち が たに あかつちとうげ
佐川 川内ケ谷 赤土峠

脱藩志士集合の碑は旧国道脇に建っているが、本来の集合地である「赤土峠」は、この碑の東方上 30 メートルほどの地点である。記念碑は昭和 14 年（1939）に建立され、この題字は元佐川領主深尾家 13 代隆太郎の筆である。

元治元年（1864）前土佐藩主山内容堂による土佐勤王党に対する弾圧が強まり、同年 8 月 14 日夜半、決死の覚悟で待ち合わせた 5 人は赤土峠に集まり、黒森山すず が とうの鈴ヶ峠もちを越え用居（現仁淀川町池川）から伊予（現愛媛県）を抜け防州三田尻（現山口県防府市）に脱藩した。その心境は題字の上の田中光顕の詠吟にも偲ばれる。

真心の あかつち坂にまちあはせ いきてかへらぬ 誓なしてき

5 人の志士の年齢は、浜田辰弥（田中光顕）22 歳、井原応輔 23 歳、池大六（山中安敬）39 歳、那須盛馬（片岡利和）29 歳、橋本鉄猪（大橋慎三・大橋慎）30 歳。井原応輔は、翌年の慶応元年（1865）に美作土居（現岡山県）にて悲運の最期をとげる。

明治に入り、田中光顕は宮内大臣、山中安敬は雑掌、片岡利和は侍従。大橋慎は大議生となり、それぞれが明治政府で要職を歴任した。

23 ずい おう じ あと 瑞応寺跡



指 定 町指定史跡 昭和 48 年（1973）4 月 20 日

所在地 黒岩 瑞応

年 代 室町時代

黒岩郷領主片岡茂光が永禄 3 年（1560）に死去し、夫人（長宗我部国親の妹）は理春尼と号し、永禄 9 年（1566）夫や兄、一族の菩提を弔うため瑞応寺を創建したと伝えられている。

『長宗我部地検帳』には右のような記載があり、瑞応寺中は 3 反強の広さがあったお茶も作っていたことが分かる。

この瑞応寺は黒岩郷の太多川村、菖蒲村、黒岩村、源住村、瑞応村、杉尾村、井藤太村に点在する「尾川分」として 47 筆の寺領をもち、その門前の「アンヤシキ」「土居ノ前」は 1 町 3 代と 1 町 20 代の田が「テサク」、つまり直営されている。

この瑞応寺跡では、県指定保護無形民俗文化財である「瑞応の盆踊」が毎年 8 月 16 日に奉納されている。

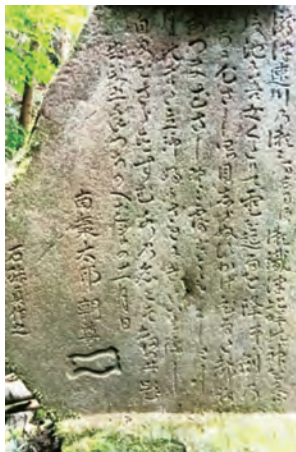
アンヤシキ	同（スイアフノ村）同し領（瑞応庵領）
一、（所）五反	出五反三代式分内荒四代
上二反	同（尾川分）
内中二反	テサク
残下五反四十九代二分勾	
瑞応寺中	同
一、式反	同
中屋敷	瑞応庵領
出五反五代才内茶十代	

『長宗我部地検帳』（部分抜粋）

24 南海太郎朝尊鍛工房跡と劔井



劔井の碑



碑の裏



鍛工房跡



南海太郎の造刀と刻銘（佐川町立青山文庫蔵）

指 定 町指定史跡 昭和 48 年（1973）4 月 20 日

所在地 黒岩 ^{ふたつの}二ツ野

年 代 江戸時代 安政 5 年（1858）

南海太郎朝尊^{どうこうめい}は刀工名であり、梁川星巖^{やながわせいがん}の命名であると伝わる。通称は森岡友之助。長ずると刀工修行のため上京し、伊賀守金道^{いがのかみきんみち}ら各地の刀工に学び、京都では当代一流の思想家、志士と交わり、勤王の志も篤かった。安政 5 年（1858）に帰国し、二ツ野鈴原で鍛刀。佐川の古沢八左衛門（南洋）、二ツ野の森岡亦次郎（朝国）等に技を伝えた。『新刀銘集録』他数冊の書物も著している。鈴原の鍛工房跡と鍛刀のため水を汲んだ井戸を劔井といい、今にその跡が残っており、劔井の碑（砂岩）には伊藤徳裕（蘭林）、春樹、道雄の銘があり、裏面には南海太郎の言葉が刻まれている。

25 でん さ かわ えっちゅうのかみ はか 伝・佐川越中守の墓



昭和の頃

指 定	指定史跡 昭和 48 年（1973）4 月 20 日
所在地	佐川 上郷 かみ ごう
年 代	室町時代

古来、佐川様の墓と呼ばれていた佐川越中守の墓と伝えられる。元新福寺境内地であり、あまた数多の墓石が集まっていて、どの墓石が佐川越中守であるのか判定できない。深尾家 4 代重方によるとうろう灯籠が元禄 15 年（1702）に一对寄進されている。いつの頃からか中台が上下逆となり宝珠も変わっている。